沖縄―軍隊が来た島の悲劇　「伊江島の戦争」から学ぶこと

基地のある所に戦争はやって来る

米軍は 1500m滑走路 3 本持つ伊江島を占拠し、飛行場を奪って前進基地として利用しようと考えた。米軍が伊江島の飛行場を狙っていることを知った日本軍（宇土部隊）は、米軍が伊江島に上陸したら砲弾で攻撃しようと対岸の本部半島八重岳に潜んでいた。伊江島には住民もいたのに。

しかし、それに先駆けて米軍は、本部半島の付け根を遮断（1945 年 4 月 8 日）して日本軍（宇土部隊）を掃討してから、伊江島に上陸（1945 年 4 月 16 日）した。

城山（ぐすくやま）（伊江島タッチュー）を除いて、平坦な地形の伊江島は日米両軍にとって飛行場建設の適地となり「不沈空母」の役割を担うことになった。

歴史から学べば、現在の南西諸島における陸上自衛隊配備は戦争を呼び込むことに他ならない。かつて「国体護持のための捨て石」とした沖縄に、今度は「日米同盟のための捨て石」になれ、とでも言うのか？

軍隊は住民を守らない

島全体が飛行場建設を急ピッチで進めていた頃、土運搬に従事していた徴用の農夫が、大衆の中で日本軍に虐殺された。馬車に座ったまま日本兵に敬礼したことを、日本軍を侮辱したと見なして、両足を縛って馬に曳かせて殺した。おそらくは沖縄住民への見せしめであったと思われる。恐怖は従属させるための最も有効な手段である。

遮断された本部半島の付け根から一部逃れた日本軍（宇土部隊）は、食料を奪うために住民をスパイだと言って渡野喜屋（現・白浜）、喜如嘉で住民虐殺を行っている。伊江島では戦闘終結後もスパイ容疑での「処刑」「見せしめ」は続いた。

「沖縄戦」は国体護持の持久戦だった。牛島満率いる第 32 軍は、大本営から見れば「捨て石」であり、その第 32 軍によって、本部半島に配置された宇土部隊は「捨て石の捨て石」だった。制海権も制空権も米軍に支配され、一切の物資輸送が出来ない状況で「一木一草を戦力化」する方針により、住民は否応なく戦闘に巻き込まれていった。

現在、台風で 1 週間船が止まれば食料が滞る島々に、戦争になった時の住民保護のために地下シェルターを作る、など言い出す自治体の長がいる。机上の空論に過ぎない。海も空も制圧された中で、例えば人口 55,000 人を超える宮古島に 1 日で 16 万 5 千食、10 日なら 165 万食を一体誰が食料を補給するのか。

弾薬庫やミサイルなど無駄な武器を置かず、自衛隊基地を撤退させる方が住民にとってはるかに安全である。

安保 3 文書では、日本にとって最大の脅威は中国と位置付けた。中国は日本にとって輸出入ともに貿易額第 1 位の重要な国であり、両国には日中平和友好条約がある。その第二条に「いずれの地域においても覇権を求めるべきでなく」の文言がある。武器の購入に 43 兆円も無駄な税金を使うと公言する政府ではなく、外交できる政府に変える方が、国民にとってコスパが良い。

命どぅ宝

日本軍のうちだした「軍官民共生共死」の県民指導方針によって住民が戦闘に巻き込まれていったのが「沖縄戦」の大きな特徴だ。「乳飲み子を背負っての斬り込みがあった」という証言がある。敵に絶対に降伏を許さない強制は「集団死」を発生させた。伊江島ではアハシャガマ、タンダタ壕、タバクガマなどで起こっている。

展示パネルで色画用紙に手書きで記入したのは、戦後の伊江島で非暴力の戦いを続けた阿波根昌鴻さんの言葉だ。次の戦争の準備をし続ける米軍の傍らに居続けた人が発する言葉に、今こそ耳を傾けたい。

戦争は軍隊だけで出来ない。下支えする民が必要だ。教育はそのための重要な手段となる。2006年に教育基本法を改正した目的は、愛国心を持って進んで戦争に協力する人材の育成だ。正しいお辞儀の仕方、家族への感謝、奉仕や貢献は美徳、郷土や国を愛する心、そんな道徳教育の先にあるのは、戦争に反対する人々を「非国民」と位置付ける世論の醸成である。一見正しそうで何がいけないのか分からない方法でじわじわと進めている。

新たなる戦前は、現政権により着々と進められている。学術会議任命拒否、重要土地規制法、安保３文書、マイナ保険証、強制帰国なら殺されてしまうかもしれない人の送還を可能にした改正入管法など、人を幸せにしない法制はどんどん進むのに、LGBTQ+の差別には無頓着で同性婚の法制化は進まない。多数派である異性愛者の権利を何一つ後退させるものではないのに、「社会の形が変わってしまう」という差別的発言をする人が、この国のトップに立つ。民主主義は多数決ではない。

たった一人の個人のささやかな幸せを踏み躙る、その人権感覚の先に戦争は待っている。無関心の先に戦争はやって来る。戦争になれば、誰一人無関係ではいられない。強者に付き従うのではなく、目の前の弱い者に寄り添い、新たなる戦争への道を喰い止める一本の杭に私はなりたい。

2023/6/14　嶋田由加里

参考文献：語り継がれる真実 in 伊江島（名護市教育委員会）
伊江島　平和ガイドマップ　解説書（わびあいの里）
命こそ宝　阿波根昌鴻著（岩波新書）
米軍と農民　阿波根昌鴻著（岩波新書）

軍事同盟では日本の平和と安全を守ることは出来ない道理はどこにあるか？

アメリカが守ってくれる？幻想を持っている人こそ、日米安保条約と日米地位協定を読んで欲しい。

沖縄―軍隊がいる島

『辺野古座り込みで、ごぼう抜きされて…』

ゲート前
にわかベンチで座り込ム

私がこれまで沖縄に行ったのは 10 回以上になりますが、その多くは県民集会に参加し、辺野古で座り込みに参加することでした。

2017 年は土砂搬入が始まり、それ以前とは違いかなりハードなものでした。

2017 年 5 月 15 日と 16 日の私の体験をお伝えします。

辺野古の基地前の座り込みは、ゲート横のテント下で現状報告を聞いたり、参加者が自己紹介をしながら沖縄への思いを語ったり、「沖縄を返せ」などの歌の練習をしたりして、皆の思いを共有します。

そしていよいよ見張りから「土砂を積んだトラックが来たぞ～」の連絡があると、大急ぎでゲート前の機動隊の車の前にブロックを並べ、その上に板を渡して即席ベンチを作り、そこに座り込みます。

機動隊にひき抜かれないように、隣りの人とぎゅっーと腕を組みセンチくらいの布を両側の人と各々結び、たとえ機動隊に腕をつかまれ離されても、胴体は離されないようにしました。幅広の布にしたのは、紐など細いものだと機動隊に引っ張られた時に紐が腹部に食い込んで内臓破裂を起こすかもしれないからです。

大雨の中、カッパで頑張る！

そんな座り込む私たちに機動隊は襲いかかってきます。必死で耐えても、何人もの屈強な体格の機動隊に掛かられては、圧倒的な力で端の人から剥されてしまいます。

私は真ん中付近に座り、両隣の人としっかり腕を組み、布の結び目を脇の下に隠し、体を小さく丸め力を込めていましたが、複数の機動隊に力ずくで紐を解かれ、左隣りの人が剥され、右隣りの人からも剥されてしまいました。

そして二人の機動隊に両手両足を持たれ、運ばれていきます。沖縄の基地反対闘争は、阿波根昌鴻さん・瀬長亀次郎さんの非暴力の教えを守っているので、暴れ抵抗することはしません。でも、口は自由を奪われていないので、運ばれながら両側の機動隊員に向かって、「あなたもウチナンチュウでしょう？沖縄戦のこと知ってるでしょ？あなたのオジイやオバアも、戦争の犠牲者だったんじゃないの？私たちは、また戦争にならないように座り込みしてるのよ～」と大きな声で話しかけます。でも彼らは、無表情無反応で、私と目を合わせることなく、基地のフェンスと機動隊のバスの間に作られた人間の檻の中に運び入れます。

ごぼう抜きされ、機動隊の車で囲まれた中へ押し込まれる。

そしてとうとう座り込んでいた全員が撤去されると、ゲート前に列をなして待っていた土砂を積んだダンプトラックが次々とゲートに入っていきます。何十台も何十台も…。

「機動隊帰れ」と叫んだり、「沖縄を返せ～」を歌いながら、ダンプの台数を数えていましたが、あまりにも多くて数が分からなくなってしまいます。

くやしい！くやしい！くやしい！悔し涙が流れます。

ここに巨大な軍事滑走路を造るだなんて・・・！このきれいな海を土砂で汚してしまうだなんて…。ジュゴンが住むこの海を…。

おそらくダンプの運転手も、ガードマンも、そして機動隊も沖縄の人でしょう。

好んでこの仕事をしている人ばかりではないでしょう。生きていくために仕方なく、この仕事をしている人もいると考えると、この島に分断を押し付けている政権に猛然と怒りが沸きます。

沖縄の基地の問題は、沖縄だけの問題ではありません。日本の問題です。地球規模の世界の問題です。

2017 年 5 月 16 日の看板

現在、沖縄には、米軍基地だけでなく、自衛隊の基地も次々に作られています。

平和憲法を持つ日本は、軍事力を高めて敵を作り出すのでなく、やるべき役割があるのではないでしょうか？

なぜ人は戦争をするのでしょうか？もうやめましょうよ…。戦争や紛争で傷つき、涙を流す子どもは見たくありません…。

沖縄の問題を人ごとでなく、自分のこととして考えてみませんか？（K・W）

2022 年 12 月 25 日～28 日の「復帰 50 年の沖縄の“今”を見る旅」では、那覇～伊江島～辺野古～高江～辺戸岬～うるま市‥と訪ね、沖縄各地の闘いの現状を伺いました。

辺野古基地建設現場では、浦島悦子さんからお話を聴いて、金網越しに物々しくガードマンが立つ建設現場を見、「テント村座り込み 6924 日」の看板に出会ってきました。

東村高江では、伊佐真次さんから N1 ゲート前でヘリパッド建設工事についての説明を伺い、高江中学校を訪ね、自然豊かな「やんばる」が、人にも他の生き物にも危険な地域となった現状を伺いました。

高江のヘリパッド建設工事

米軍北部訓練場では、ベトナム戦争時にジャングルでの戦闘を想定して訓練を行っていました。いらなくなったその一部を返すと見せかけて、新たに 6 箇所のヘリパッドを完成させ、オスプレイが超低空で集落上空を飛び回っています。電柱の先がオレンジ色のキャップで覆われている光景は異常です。高さだけの問題ではなく、低周波、爆音、振動、その上に墜落の不安で住民の生活は脅かされています。ヤンバルクイナ、ノグチゲラなどの絶滅危惧種も数多く生息していますが、彼らは安心して巣作りをすることも出来ません。

近くには 5 つのダムが点在し、沖縄本島の生活用水の 60%を担う貴重な水源地です。有害な化学物質、放射性物質で汚染されれば、県民の「命の水がめ」は取水停止の大惨事となります。（嶋田）

うるま市では、嘉手納基地爆音訴訟について、原告団具志川支部事務局の佐々木末子さんのお話を伺い、機体や部品落下の恐れだけでなく、戦闘機が飛び交う爆音にさらされている日常を体感させられました。